



2020年10月にリニューアル工事が完了



昭和の雰囲気が色濃いホームの跨線橋

芸備線ストロール①

「旧友」の跨線橋と 西城川での水遊び

備後庄原駅

木次線を完走、残るは芸備線の逆方向、三次駅方面、さらには広島駅方面である。備後落合方面同様、一度も下車したことのない駅がほとんどだ。新芸備線ストロールとして連載を開始する前に、地元の駅である備後庄原駅のことを書いておきたい。

7月19日日曜日、備後庄原駅を訪れた。35度の猛暑日で、歩いて

いるだけで、全身から汗が噴き出してくる。2020年10月、全面的なリニューアル工事が完了、バスのロータリーを備えたモダンな駅舎に生まれ変わった。待合室だけではなく、市民の交流スペースも併設されている。ちなみに「備後」という地域名を冠したのは、山陰本線に同音異字の庄原駅がすでに存在していたからだ。

簡易委託駅で、改札の窓口で入場券を購入、料金は150円。ホームの中は、ほとんど変わっていない。昭和の空気がまだ色濃く残っている。意地悪な言い方をすれば、ホームまでリニューアルする予算がなかったのだろうか。

備後庄原駅の思い出は、高校を卒業するまではほとんどなかった。庄原の地を離れることが滅多になかったからだ。大学に入ってから、帰省する度に列車を利用するようになった。

調べてみると午後の便しかない。「急行たいしゃく1号」が正解で、庄原駅8時9分発の便に乗って、広島駅10時1分到着。それから新幹線に乗り換えた。

庄原にUターン後、東京在住時代の友人から電話、「広島まで来てるんだけど、会えない?」。庄原から広島市内に出るのがいかに大変かを訥々と説明。急行も広島駅への直通便も無くなってしまう。今の芸備線は、昔よりもさらに遠くなってしまった。

三次駅方面行きが一番ホームには、広島東洋カープの大きな人形が置かれている。目つきの鋭い前田智徳、ホームランを打った後?

のガッツポーズ・丸佳浩、華麗なスローイングの菊池涼介、「ドラフトで大瀬良の当たりくじをひいた田村スカウト」はマニアックだ。

ホームの西側には、「赤松&天谷スパープレー人形」がある。外野フェンスによじのぼってホームランボールを奪い取った場面が再現されている。これらのカープ人形は、庄原市内のデザイン会社IKIコーポレーションが制作したものでマツダスタジアムに展示されていたが、球団の厚意で里帰りを実現した。今年のカープは苦戦しているが、未来のために今を頑張れ!

跨線橋を登った。鉄製で錆だらけ、以前のまま、いや、さらに歳



車橋から見た西城川。鮎の味は日本一！



駅前通りの側溝では沢蟹が取れた

月を経てくたびれたか。しかし、旧友に出合ったかのような懐かしさを覚えた。ちなみに初代の跨線橋は戦時中の鉄不足で供出させられ、今の跨線橋は国鉄時代末期の1984年に再設置されたという。

島式ホームの2、3番線は、夜のイメージが強い。帰省時、どつぷりと暮れた夜のホームに降り立った。以前は盆暮れとまめに帰省していたのだが、何かと理由をこしらえて帰省する回数も減った。老親の待つ実家へ向かう足取りは重かったことを覚えている。昼間見る2、3番線ホームはアツケラカンと明るく、北側には太陽光発電パネルが並んでいた。駅の外に出て、駅前通りを西に向かっ

た。二股に分かれている道があつて、右の線路沿いの道を進むと旧出雲路の道路にぶつかる。右手の芸備線の踏切を渡って進むと西城川の車（くるま）橋に出る。子供の頃、この橋の下で泳いだ記憶がある。ガラスの破片で足裏をざっくり切ったことがあるのだが、ズックにヨモギの葉を敷き詰めてそのまま遊んでいた。2024年「第25回清流めぐり利き鮎会」で、エントリーされた全国59河川の中で、西城川の鮎がグランプリを受賞、誇らしい気持ちになった。

この地域は太古の時代は海だった場所で、西城川の河床の約1600万年前（中新世）の地層から、多数の古代クジラの化石が発見されている。庄原市立比和自

然博物館で展示、実物を見ることができると、近々にある「辻本玩具店」でメンコや安いプラモデルを買った。坂道を登り切って、広島銀行だった建物を右に折れると、新道（しんみち）と呼ばれる小路がある。その奥まった場所に、子供のワンダーランドがあつた。名前は忘れてしまったが、お好み焼き屋と貸本屋、駄菓子屋が合体している。鉄板で一番安い焼うどんを食べながら漫画を読む。食べている間は無料なのだ。お金が残っていれば10円のねぶりくじをひく。紙片をぺろりと舐めると文字が浮き上がる。ハズレの駄菓子も食いでがあつた。

崖の途中にできた駅前通りは、両側が切り立った崖で、並んでいる店舗や住居の裏が崖だった。反対側の斜面はコンクリートや石垣で固められていて、湧き出た水が流れる側溝が今でもある。苔むした石垣の隙間に沢蟹がいて、捕まえて遊んでいたが、今思うと残酷なことをしたと思う。

赤川薬店の他にも「岸金物店」「竹島ガラス店」等の専門店があつた。人工ダイヤを取り付けたガラスカッターでガラスをスイスイ切断する作業がおもしろくて、飽きずに眺めていたのを覚えている。駅前通りの家屋は地盤沈下による傾きがひどくになって、今ではほとんどが空き家になってしまった。

旧出雲路を新道に折れないで進むと「小池書店」がある。子供の頃は漫画雑誌の立ち読み専門だったが、中学ぐらいから小遣いを貯めて文庫本を買うようになった。学校の図書室で好きな作家の本をすべて読んでしまうと、小池書店の本棚を物色する。角川書店の出版で、江戸川乱歩の青い背表紙の文庫本、横溝正史の黒い背表紙の文庫本、読んでいない本を見つけると心が踊った。

中学のときに祖父が亡くなり、赤川薬店もなくなってしまったので、駅前通りや新道に行く機会も少なくなった。今回、写真を撮るために再訪したが、子供の頃の記憶が鮮やかによみがえって、自分でも驚いている。



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「緋の河」

桜木紫乃 著 新潮文庫

カルーセル麻紀をモデルにした半生記。まだ性同一性障害という言葉などなかった時代、性転換者としてテレビの深夜番組で妖しい色気を振りまき、“女優”としても活躍した。

幼少期から小柄で華奢で「女になりかけ」とからかわれ、いじめられた。彼も、きれいになりたい、男性から愛されたいという自分の性向を隠さない。「あたしは、あたしのことが好き。

自分が嫌いだったら、とつくに死んでと思うわ」。釧路の封建的な実家を飛び出して、札幌、東京、大阪の夜の町をハイヒールで闊歩！

エロスの部分が脱臭されたのは、新聞小説なので仕方がないが残念。その分心情が丹念に描かれている。



「うらやましい孤独死」

森田洋之 著 フォレスト出版

タイトルに惹かれて購入した。孤独死というマイナスなイメージだが、「うらやましい」というのはどういうこと？ 著者は経済破綻した夕張市の診療所で勤務した経験を持つ。夕張では大病院が閉鎖されて病床数は減り、高齢者率は50%を超えた（日本一）が、総死亡率は変わらなかった。病死が減って老衰死が増え、救急出動が半減した。



独居高齢者を医療施設に入れる余力がなくなった故の結果である。逆に言うと、今の医療は高齢者の“収容施設”になってしまっている。肝硬変で余命いくばくもないじいさんが、自宅で大酒を飲んで大往生、うらやましい最後である。

「幸福ロケット」

山本幸久 著 ポプラ社

お客さんに「おもしろい本はありませんか？」と訊かれて、以前はこの作者の本を勧めていた。しかし、反応は芳しくない。原作がドラマ化されたり映画にもなっていて、そこそこ知名度のある作者なのだが……。

わたしにとっては、外れの無い作家リストの上位。ほのぼのと幸せな気分させてくれる。気分が落ち込んだときでも、まんざら生きることも悪くないと元気をもらえる。



本作も、小学5年生の恋を描いて切なくもあたたかい。中年のオッサンが書いているはずなのに、登場する子供たちに違和感がないのだ。主人公が本好きなので、本のタイトルがたくさん登場するのも嬉しい。

どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買います。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

「棟梁横山林太郎」(続き)

高柴順紀 (菊栽培農家)

東城町栗田のS氏が保管していたものには、建築儀礼としての資料も残されていた。その一つは「太子祭り寄付帳(大正四年秋)」である。これは大工、左官ほかの職人達が集まって職の祖と崇める聖徳太子を祀る講の記録で、飲み食いを兼ねた親睦の場であったのであろう。狭い地域の中だからこそ、仲間意識がなければ家も建たないのだ。今はどうなのであろうか。

また大工棟梁にとつての最大の建築儀礼は棟上げ(上棟祭)です。建物の骨組みが完成すると二階などの

高い所に祭場を設けます。大工が神聖とする道具の墨壺と曲尺などを飾り付け、棟札を前にして神官が工事関係者の安全と施主の繁栄を祈ります。

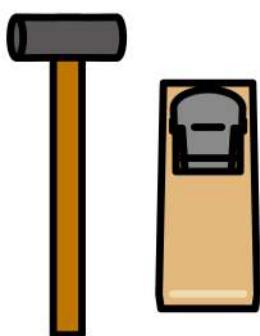
棟札は棟の中央辺りに保存されます。しかし天井が出来れば見えなくなり、時とともに影の存在となる運命にあります。棟梁にとつてはこれ以上に誇るものは無いと思う。三楽荘母屋の棟札には写真の様に「奉棟上御中主大神出雲教大神守護攸棟梁横山林太郎時成」と力強く墨書してあります。



ところでこの両側に手置帆負神と彦狭知乃神が記されていますが、最初読み方も何の神かも分かりませんでした。『古事記』をめぐっても記載されていないのです。調べてみると少し後から作られた『古語拾遺』に『古事記』で欠落した神を補足するように天照大神がスサノウの悪行に悲観して天岩戸にこもった時、手置帆負命(たおきほおいのみこと)と彦狭知命(ひこさしりのみこと)が天照大神が外に出られたら住まわれる御殿を、山から木を切り出して造営したとあった。この神話がもとで大工さんの信奉する神様が生まれたのだ。

また別のところで二柱の神さんを見たような気がしたのです。多分神楽関係かなと思い東城教育委員会編纂の『比婆荒神神楽』を出してみる。間違いなかった。比婆荒神神楽社所蔵「こけら祓いの能」に登場していました。新築した家のこけら(かんなくず)を掃き清める能です。都会の劇場などでは「こけら落とし」だとして大々的に新築の祝いに芝居などしますが、田舎の比婆では新築を祝って小神楽をされる家もあります。そのために用意されてきた能かもしれません。そういえば昔、私の同級生の家を見たことはありますが、二人の滑稽な芸をうら覚えしてるぐらいで神さんのことなど全く覚えてはいません。

この能本を見ると大山祇(おおやまずみ)命が当家のこけら払いをするために手置帆負命と彦狭知命を呼び出すのですが、現れたのはそれぞれ命に仕える男二人。熊手やほうきを持って滑稽な所作と話芸で座を盛り上げ、おめでとうございまずと斉唱して終わるようになっていきます。世の中AIで騒いでいますが、何時までも職人さんの世界が続くようにと願わずにはいられない棟梁家の資料群でした。



寄稿エッセイ

雨情の「備後庄原節」

清水季子

旧庄原市には伝えられている民謡が4曲ある。しっかりした年代は不明ですが、古い曲から揚げると、門付け唄から始まったとされる「あつもりさん」、「備後庄原節」「庄原小唄」「庄原よいとこ音頭」です。

今回は、地元の人々の作詞・作曲と言われている「庄原小唄」と同じ頃の曲と思われる「備後庄原節」（三下がり）を紹介します。三下り（さんさがり）とは、三味線の調弦方法のひとつで、本調子の第3弦（三の糸）を1全音下げたものです。

作詞は野口雨情、作曲・藤井清水（きよみ）、振付・藤本満枝、楽譜は五線譜です。雨情は明治15年生まれ、清水は明治22年生まれ。この二人の他数人で昭和8年、雨情52才の時、日本歌謡協会を設立。曲作りの旅行に何度か出掛けています。

昭和12年、支那事変が始まった頃、野口雨情、藤井清水、時雨音羽の三人で呉、庄原に足を運びました。列車での旅行は、各地で出征兵士を見

送る時局にもかかわらず、庄原では熱烈歓迎、その時できたのが「備後庄原節」と言われています。

野口雨情はよく知られていますが、藤井清水のことを少し調べてみました。呉の生まれで、母親が三味線、箏に堪能で、兄は浄瑠璃と義太夫三味線に熟練した能力を持っていた上に、理論的な研究もしていたようです。この兄が作曲家としての清水の姿勢に影響を与えたようです。清水は三味線、ピアノの演奏も大人顔負けでした。

東京音楽学校（現東京芸術大学）で、ヨーロッパ音楽や日本の歌謡史を学習、第一級の指導者たちから民俗的な表現方法を学びました。清水は自作曲の解説で「日本古来の音楽の階律に基礎を置いて作曲している」と述べています。

私はここを読んだ時、「備後庄原節」は演奏しにくいと言われたことがあるの思い出しました。昭和34年に庄原市無形文化財に指定された「民

謡あつもりさん」の稽古を、市民会館でやっていました。わたしもその一員でしたが、時々「備後庄原節」も教えてもらっていました。三味線をひいている人はみな暗譜です。

指導者は河面絹子先生、「あつもりさん」の曲を付けた人でもあります。先生は曲を聴くとすぐに三味線でひくことができる才能の持ち主でした。先生の死後、「あつもりさん」も「備後庄原節」も後世に遺すために、三味線の譜に書き下ろされました。

私は唄い手で、楽器はひけません。この曲が好きなのは、先生が伴奏で唄い出しに「ハイ」と声をかけて下さるので、上手く唄えた気がしたからでしょう。

ちなみに平成12年、「呉市制100周年記念事業」として、「藤井清水音楽祭」が開催されました。それから毎年、開催されています。その樂團が、数年前に庄原市民会館で「備後庄原節」を演奏していただいたことがあるのです。

備後庄原節（三下り）

一、備後庄原ア、コラサット

桜が咲いて 気さえ

（ハ、ヨンヤサ）浮き立つ

日がつづくナ

囃子『アリヤ庄原十七夜にや燈籠流し オヤ私もそのときやつ

いてゆく ソレヤントコセー』

二、瓢塚上ア、コラサット

山ほととぎす 昔

（ハ、ヨンヤサ）唄んで

啼いてゆくナ

（囃子…前と同じで以下省略）

三、色もとどりどりア、コラサット

弁天山に桜

（ハ、ヨンヤサ）つつじの

花が咲くナ

四、緑色よくア、コラサット

枝さえ伸びて池に

（ハ、ヨンヤサ）影さす

千代の松ナ

五、おぼろ月影ア、コラサット

つつみの桜 花も

（ハ、ヨンヤサ）ほろほろ

袖に散るナ

六、夏の上野池ア、コラサット

涼しい風も吹いて

（ハ、ヨンヤサ）気楽な

船遊びナ

七、秋の夜長をア、コラサット

空ゆく月も 篠津

（ハ、ヨンヤサ）原から

出てのぼるナ

寄稿エッセイ

雨情の「備後庄原節」

清水季子

旧庄原市には伝えられている民謡が4曲ある。しっかりした年代は不明ですが、古い曲から揚げると、門付け唄から始まったとされる「あつもりさん」、「備後庄原節」「庄原小唄」「庄原よいとこ音頭」です。

今回は、地元の人々の作詞・作曲と言われている「庄原小唄」と同じ頃の曲と思われる「備後庄原節」（三下がり）を紹介します。三下り（さんさがり）とは、三味線の調弦方法のひとつで、本調子の第3弦（三の糸）を1全音下げたものです。

作詞は野口雨情、作曲・藤井清水（きよみ）、振付・藤本満枝、楽譜は五線譜です。雨情は明治15年生まれ、清水は明治22年生まれ。この二人の他数人で昭和8年、雨情52才の時、日本歌謡協会を設立。曲作りの旅行に何度か出掛けています。

昭和12年、支那事変が始まった頃、野口雨情、藤井清水、時雨音羽の三人で呉、庄原に足を運びました。列車での旅行は、各地で出征兵士を見

送る時局にもかかわらず、庄原では熱烈歓迎、その時できたのが「備後庄原節」と言われています。

野口雨情はよく知られていますが、藤井清水のことを少し調べてみました。呉の生まれで、母親が三味線、箏に堪能で、兄は浄瑠璃と義太夫三味線に熟練した能力を持っていた上に、理論的な研究もしていたようです。この兄が作曲家としての清水の姿勢に影響を与えたようです。清水は三味線、ピアノの演奏も大人顔負けでした。

東京音楽学校（現東京芸術大学）で、ヨーロッパ音楽や日本の歌謡史を学習、第一級の指導者たちから民俗的な表現方法を学びました。清水は自作曲の解説で「日本古来の音楽の階律に基礎を置いて作曲している」と述べています。

私はここを読んだ時、「備後庄原節」は演奏しにくいと言われたことがあるの思い出しました。昭和34年に庄原市無形文化財に指定された「民

謡あつもりさん」の稽古を、市民会館でやっていました。わたしもその一員でしたが、時々「備後庄原節」も教えてもらっていました。三味線をひいている人はみな暗譜です。

指導者は河面絹子先生、「あつもりさん」の曲を付けた人でもあります。先生は曲を聴くとすぐに三味線でひくことができる才能の持ち主でした。先生の死後、「あつもりさん」も「備後庄原節」も後世に遺すために、三味線の譜に書き下ろされました。

私は唄い手で、楽器はひけません。この曲が好きなのは、先生が伴奏で唄い出しに「ハイ」と声をかけて下さるので、上手く唄えた気がしたからでしょう。

ちなみに平成12年、「呉市制100周年記念事業」として、「藤井清水音楽祭」が開催されました。それから毎年、開催されています。その樂團が、数年前に庄原市民会館で「備後庄原節」を演奏していただいたことがあります。

備後庄原節（三下り）

一、備後庄原ア、コラサット

桜が咲いて 気さえ

（ハ、ヨンヤサ）浮き立つ

日がつづくナ

囃子『アリヤ庄原十七夜にや燈籠流し オヤ私もそのときやつ

いてゆく ソレヤントコセー』

二、瓢塚上ア、コラサット

山ほととぎす 昔

（ハ、ヨンヤサ）唄んで

啼いてゆくナ

（囃子…前と同じで以下省略）

三、色もとどりどりア、コラサット

弁天山に桜

（ハ、ヨンヤサ）つつじの

花が咲くナ

四、緑色よくア、コラサット

枝さえ伸びて池に

（ハ、ヨンヤサ）影さす

千代の松ナ

五、おぼろ月影ア、コラサット

つつみの桜 花も

（ハ、ヨンヤサ）ほろほろ

袖に散るナ

六、夏の上野池ア、コラサット

涼しい風も吹いて

（ハ、ヨンヤサ）気楽な

船遊びナ

七、秋の夜長をア、コラサット

空ゆく月も 篠津

（ハ、ヨンヤサ）原から

出てのぼるナ

ハロー注意報③2

——進駐軍がいた町のはなし

山歩き山登り 松岡初枝

小学校に入学以来、秋の遠足は主に低い山歩きからけっこうな登山まで、奥武蔵のトレッキングコースはよく歩いた。一年生は飯能(はんのう)の天覧山。標高一九三メートルの低



草津白根山の火山湖、美しい湯釜

山だから楽々歩けた。二年生は日和田山。これも三〇〇メートル程の低山、一面に彼岸花が咲く川原が望める。三年生は顔振(こうぶ)り峠。西武線吾野(あがの)駅から十二キロメートル程歩く峠道、古くからの峠越えは便利な道で、幕末の志士達も多く命を落した場所で、峠の茶屋にはその名が残っている。

四年生は子ノ権現(ねのごんげん)。足腰の守り神らしく、山門には大草鞋が掛けてある。五年生は伊豆ヶ岳、標高八五一メートルのまあまあの登山で、急な岩場もあり、鎖につかまりながら必死に登った。こんな時にH君が居たらどうだろう。「はっちゃん頑張れよ」と言ったかな。一度も遠足に行けなかったH君、遠足の思い出とH君の無念さを今も思うのだ。

埼玉の北西は、秩父の山々から飯能あたりまでが丘陵地帯で、けっこう高い山から散歩程度の低山まで、行く人の足に見合った山歩きができ

るコースが多くあり、道も整備されているので、高齢者から子供までが安全に楽しめる。私は遠足を通して山の楽しさを知り、学校行事を通じた規律を守る大切さも学んだ。

我が家の祖父母と共に草津白根山に登ったこともある。「今年は白根山に登るから、靴や着る物の用意しときなさいよ」。四年生の夏休みは草津温泉に行ったが、近くの草津白根山に登った。朝早くに常宿、大坂屋のおかみさんが昼食用のおにぎりを作ってくれた。水筒も持って出掛けたが、当時はバス便など無かったから、温泉街からひたすら歩いた。温泉の湧き出る西の河原を越えると山道になる。「みんな、大丈夫かな!」祖父が先頭、祖母が一番後ろになり、声を出しながら進んだ。「さあ、もう少しだよ、頂上でお弁当食べるからね!」祖父母が声を掛けて進むと、眼下に大きな火口湖が広がった。湯釜は白みがかかったコバルトブルーで、神秘的な美しさだった。強い硫黄の臭いと、おにぎりの味は、今でも忘れられない。

次の年は伊豆の下田、石廊崎(いろうざき)の群猿を見にひたすら歩いたのも良い思い出。何しろボス猿の“次郎長”の体の大きさと、大

人の猿ばかりか子猿までもが海水でサツマ芋を洗って食べるのだ。子猿が小さい手で芋を洗う姿が可愛らしくて、いつまでも見ていたい情景だった。毎年こんな経験をさせてもらったお陰で、夏休みの絵日記の宿題の題材には事欠かずに済んだ。

小学校の時にひたすら歩いたせいもあって、私はすっかり山好きになった。中学三年生の時に、八名程の希望者だけで、南アルプスの鳳凰三山に登った。薬師岳、最高峰二八四一メートルの観音岳、大岩のオベリスクの地蔵岳。二名の先生が引率してくれた二泊三日の登山は貴重な体験だった。中でも夕方、山小屋の外に寝ころがって万天の星を見た時は、息をのむ程の美しさだった。天の川や夏の星座の輝きは、プラネタリウムで見た時よりもずっと迫力があり、いつ迄も夜空の星を見ていた。これにすっかり味をしめた私は、その後何度かアルプスへ登った。今も店のお客様と、登山やスキー行きの楽しさを語り合うが、それぞれの元気なおばちゃん達のパワーは歳を感じさせない。

祖母が六十歳になった頃、「どうしても富士山に登りたい!」と言い出した。祖父や父母は「フーン、無理



富士山頂の御来光

なんじゃないの：」と聞き流していたが、祖母は本気だった。今から六十年以上も前、若い人達の間で富士登山がブームになっていたが、六十歳を越えた女の人が富士山に登るのは珍しい事だった。ところが言い出したら実行する性格の祖母だから、当人は本気だった。「サブロー、今年の夏、一緒に行ってくれないかなあ：」。父は会社の友達と山歩きするのは好きだったが、富士山となると話は別で「おバアちゃん本気なの？ どうしても言うなら連れて行くけど：無理だと思ったら引き返すの



富士山からの下山途中、笑顔の祖母

だけは約束してくれる？」と言った。「きつと途中で音を上げると思ったんだよ」と後に聞いたが、祖母は登山靴や雨合羽、リュックなどを用意して、もう行く気満々。「サブロー、気が済むようにしてやってくれるかなあ」祖父も呆れながらも同意した。誰よりも祖母の性格を知っている祖父だから、笑顔で荷作りする祖母を応援するしか無いと思ったらしい。

天候が安定している七月の半ば過ぎに二人は出発した。「まあ、お久仁さん大丈夫かい？ 無理だと思ったら帰って来るんだよ。サブローさん、気をつけて連れてってやってよ」。近所のおばさん達の見送りに、笑って手を振る嬉しそうな祖母を思い出すと、「おバアちゃんは生まれるのが少し早過ぎたのかなあ：」という思いがする。明治生まれの祖母の決意の強さ、それを叶えてやろうとする家族、当時としてはあまり聞いたことの無い珍しいことだったと思う。

祖母と父は富士吉田口から登りはじめ、八合目の山小屋に泊まり、なんと頂上まで登り切った。途中で若い学生さん達や、登山同好会と覚しきグループに抜き去られても、ゆっくりしたペースで登った。「おバアちゃん、頑張れよー！」と先に行った学生が、九合目近くで高山病になり、仕方なく下山する場面に出合ったり、「おバアちゃん何歳ですか？ 元気出してね」と声を掛けられたりしたらしい。「みんな優しい人ばかりだったよ」。同行の父も「みんなの励ましが無難かったよ

な」と感謝していた。山頂では御来光も見られ、火口一周もして望みが叶った祖母が持ち帰った金剛杖は、かなり擦り減っていたが、その杖の一番上にペナントが付いていた。『富士山頂三七七六M』と書かれ、その下に「浅間神社」の焼き印が押してある。しばらく家の裏口の奥に立て掛けてあり、「お久仁さん見せてよ」というおばさん達のリクエストに、自慢気に見せていた。「これが無いと砂走りの下山が大変なんだよ。ザーザーと滑りながら下ったけど。おもしろかった！」。富士に味をしめた祖母は、その後木曽御岳にも登った。私の下の弟も山好きで、七月一日の富士山山開きには毎年登り続けた。

いろいろ思い出してみると、昭和三十〜四十年代に祖父母が孫を連れて山登りしたり、自分達も山や川で楽しんだことはまだまだ稀なことだったと思う。遊ぶのが好きだった二人に教えて貰った事は、生きる上でのメリハリかもしれない。よく働く、楽しく遊ぶ、これが我が家のDNAかな。

わたしのマッシュルームハウスに、村民のおもだったメンバーが集まっていた。アキラさんは、毒ナバハウスと呼んでいる。ナバはこの地方の方言で、キノコのことだ。

「まず最初に、はつきりしておきたいことがある」

アキラさんがホアホアの顔を見て、強い口調で言った。

「君は、日本語がしゃべれるんだよね」

白い仔猫を膝に抱いたままで、ホアホアが視線を伏せたまま頷いた。

「じゃあ、まずは余計なお土産から始末しておこうか。君の腕時計を見せてもらえるかな」

一瞬、怪訝な表情を浮かべたが、素直に腕時計のベルトを外してアキラさんに手渡した。文字盤にブルーの顔がデザインされている。

「頼むよ」

受け取ったシューさんが、用意していた道具類を取り出した。先端を薄く研いだマイナスドライバーを操作して、腕時計の裏蓋を開けた。大きな電池が入っている。それをピンセットで取り出して、じっくり見た。「型番までちゃんと刻印してある。よくできているが、番号はデタラメだ」

持参の菓子箱から同じ大きさのボタン電池を探し出して、腕時計に装着した。裏蓋を嵌めなおして時刻を調整、「よし」と小さく頷いて、ホアホアに返却した。

「この電池が発信機になっているんだ。それで奴らは、君の居る場所にまっすぐ向かうことができた……」

アキラさんの言葉に、ベルトを留めようとしている手が止まった。

「それで、あんたはいつたい何者なの？」

場の空気が凍った。

「ちよつと年齢のサバを読んでいただけじゃないか。何か理由があったんだろ？」

シューさんが擁護した。

「ゴメンナサイ……、学生の旅行で来た、言った方が、心配しない、思った……」

徐福伝説4

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑪⑤

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「大丈夫、発信機はもう取り出したからね」

シューさんに言われて、彼女が笑顔を見せて腕時計のバンドを留めた。「話をついたよ。君はもう自由だ」

アキラさんが、緑色のカバーのパスポートを差し出した。受け取ったホアホアの目に涙が溢れた。

（まったく、男は女の涙に弱いんだから……）

たどたどしいが、会話に支障はないようだ。

「あんた、万藤美虎（まんとうみこ）の曾孫じゃないんだろ？」

ホアホアの顔が強張った。

「そんなバカな……、写真を持っただけじゃないか……」

「あの写真、どこで手に入れたんだい？」

ホアホアが決意したように涙を手

の甲で拭った。首の後ろに両手をやると、銀色のペンダントの鎖を外して、Tシャツの下から取り出した。古風なロケットがついている。龍が掘られた蓋を開けると、小さな顔写真が現れた。なかなかの美男子、いや、美少年か。

「ヴォー・ファン・ダイゴ、本当のグレイト・グランド・チャイルド……、ヒマゴ、さます」

しばらく間が空いた。

「ダイゴとワタシ、ハノイの孤児院、一緒に大きくなった。ダイゴ、自分のルーツ、日本にあると言った。いつか行く、ダイゴの夢……」

「そのダイゴはどうしたの？」

かなり間が空いた。

「マラリア、とてもよくない……、難しい、死にました……」

また涙が溢れだした。

「ダイゴの代わりに万藤美虎の写真を届けてくれたのね。でも、どうしてあんな嘘をついたの？」

「ワカラナイ……、みんな、とてもイイヒト……、ダイゴが死んだ、言えない……」

気持ちちは伝わってきた。彼女自身、ダイゴが死んだことを受け止めることができていないのだろう。

「君はすぐにここを立ち去るつもり



だったんじゃないか。だから、年齢も含めてあんな嘘をついた」

アキラさんの言葉に、彼女が頷いた。

「ワタシ、ここにいる、みんなヒドイことになる」

あの蛇とゴリラのコンビのことを思い浮かべた。恐れるのも無理はない。

「しかし、彼女が曾孫じゃないとよくわかったな？」

アキラさんの視線を受けて、わたしは胸を張った。

「遺伝子の本能が教えてくれたわ！」

万藤家は女系家族だ。強い女が

家を守り、家族を支えてきた。ホアホアのような可憐な乙女が生まれるはずがないではないか。

（あたしとちつとも似てないじゃない）

「で、これからどうするつもり？ あんた、妊娠してるよね？」

爆弾発言だった。チャドさんが目を見開いた。シューさんはポカンと

口を開けて、アキラさんは唇を引き結んで、まるで阿吽（あうん）だ。

「ひよつとして、ダイゴの子供？」

ホアホアが顔を赤らめて頷いた。

「じゃあ、ここで産むしかないわね」

「ちよつと待ってくれ……」

アキラさんが口を挟んだ。

「この村は、行き場のない者たちが最後のときを過ごす居場所だ。将来は誰もいなくなる。だから、今でも

廃村のままにして、電気水道のインフラも整備していない。子供を産んで育てる場所じゃあないんだ」

今まで無言だったチャドさんが立ち上がった。

「アフリカのサハラ砂漠にあるわたしの村は無くなりました。部族間の争いで、家も畑も家畜も失いました。でも、故郷はここにあります」

胸を拳でドスンと叩いた。

「家族の笑顔も、山羊の鳴声も、す

ばらしい星空も、全部、心に残っています。だから大丈夫、思い出は

なくならない。どこにいても、誰にも奪うことはできないわたしの宝

物です」

アキラさんが、仕方がないなど苦笑を浮かべて頷いた。

（あなたも、徐福に興味を持ったのね）

大叔母に話しかけた。だから、満州に行くことを決意した。馬賊とな

って敗走して南下、ベトナムに向かったときも、徐福の故郷（斉国の琅邪郡）に立ち寄ったのではないか。

「徐福は三千人の童男童女（若い男女）と百工（多くの技術者）を従え、

財宝と財産、五穀の種を持って東方に船出した」と史記に記されている。

これが本当であれば、目的は国造りしかない。平和な国家を造り、子孫

が未来永劫繁栄することこそ不老不死の妙薬。始皇帝の死後、わずか十

五年で消滅してしまった秦国への皮肉でもある。

ホアホアの中に宿った生命は、万藤美虎からのメッセージのように思

えた。

（きつと強い女の子が産まれてくる……）

そう確信した。

ますの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
- ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
 - 定休日：毎週日・月・火曜日（2月は在庫整理で休業）
 - TEL: 090(9913)3052
 - 営業時間 9:30～18:30（昼食休憩 12:00～12:30）
- ※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

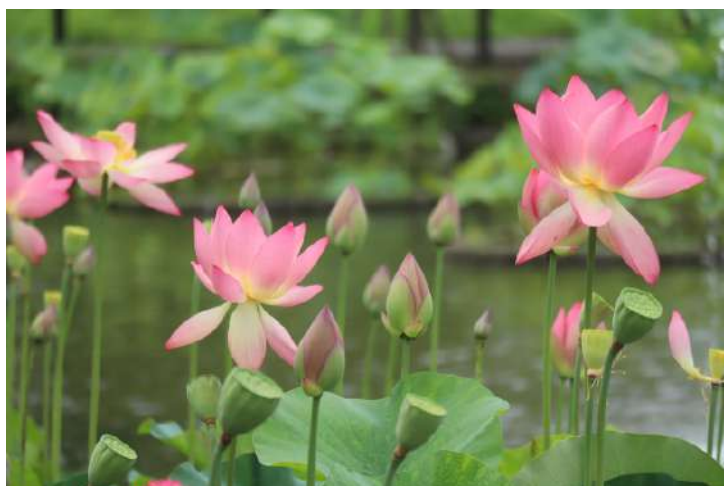
「旧暦」のカレンダーを見る

古川 行洋

第六部 旬と花を見る

今年の七月一日から三十一日は、旧暦では五月十七日から六月十八日まで。

五月と六月の旬
うなぎ（鰻）



古くから日本人に親しまれている魚で、『万葉集』にもその名が記載されています。一般的に蒲焼きや白焼き、肝吸いなどに調理されますが、生で食べることはほとんどありません。これは、鰻の血が人間にとつては毒であるためです。

なお、江戸時代前期まで鰻はぶつ切りにしたものを串焼きにしていた。その形状が蒲の穂に似ていたため、鰻を焼いたものを「蒲焼き」と呼ぶようになったそうです。

枝豆

毎年五月から六月ごろに、大豆は枝が分岐しているところから、紫色の小さな花を咲かせます。その花が自家受粉してつくった種が、サヤに包まれた大豆なのです。品種としては、味噌や豆腐などの原料となる大豆と同じです。収穫する時期が早く、未成熟なものが「枝豆」となり、市場に出回ります。

大豆は、タンパク質が豊富に含まれていますが、有毒なタンパク質で

あるプロテアーゼ・インヒビターやレクチンが含まれているため、生で食べることは禁止です。そのため、枝豆のように茹でて加工食品にしたりして食べるのが普通です。

日本では、奈良時代に茹でた枝豆を食べた記録が残されているとのこと。

はも（鱧）

梅雨入りから、七月頃に脂がのる旬です。体長は一メートル以上にも成長し、食材としては小骨が多いので、身に細かく包丁を入れて骨抜きをして、食べやすく下処理をします

鱧は、関西では夏の高級食材として、また暑い季節に精をつける食材として、鰻と同じように人気のある魚です。そして、京都の祇園祭りや大阪の天神祭りには欠かせないものになっていきます。特に祇園祭りは「鱧祭り」と呼ばれるくらいで人気を高くしています。

はす（蓮）

インド原産のハス科多年生の水生植物で、地下茎から茎を伸ばして水面で葉を出します。古名である「ハチス」とは、花托の形が蜂の巣に見えるからだとされています。ほかにも古くは芙蓉、また池見草といった別名をもっています。

蓮の果実の皮が非常に厚く、中そのままの状態に保つことができません。昭和二十六（一九五二）年に、千葉県の落合遺跡で、二千年前の弥生時代の蓮の実が花を咲かせました。

こち（鮎・鰻）

夏を代表する昔ながらの高級魚です。必ず夫婦一緒にいる魚で、オスカメスが一匹釣れると、もう一匹も釣れると、釣り仲間のあいだでは言われています。上品な甘みのある白身は握りで頂いても美味しいです。また、高タンパク質、低脂肪なので夏バテ対策にも効果があります。

岡山の郷土料理に「こちのかけ飯」があります。こちのアラを茹でて、身だけをほぐして取ります。こちの茹でた汁に野菜と一緒に入れて、醤油で味付けしてご飯にかけたら出来上がりです。



ヨーロッパ23日間「卒業旅行」(23)

マック☆ヤマザキ

3月10日土曜日、エーゲ海クルーズ中のイドラ島でのことだ。海岸沿いに駐車されていた日本製の古いバスが気になりカメラを取り出した。“日野”(HINO)製のバスで、日本で



はお目にかかれない代物なのだ。

ピントがぶれないようにと脇を締めて、シャッターを押そうとしたときだった。なんとびっくり!「俺も忘れちゃ困るんだな」と、マツダのオート三輪車(バタンコ)が割り込んで来たのだ。2組の被写体といい、そのタイミングといい、願ってもない写真を撮ることができた。

旅していると、いろいろなことに会おう。およそ40年前、南米ペルーで標高約2400mの山上に築かれた世界遺産のマチュピチュ(空中都市)を巡るツアーでのこと。クスコから乗り合わせたディーゼルカーの車内に「近畿車輛」と日本語のプレート!「こんなところで……」と嬉しかなり、お客様と喜びを分かちあった。

3月11日日曜日、朝食後は自由行動にした。正午、バスでアテネ国際空港へ出発する前の確認。「パスポートを見せて」と言うと、あれほど注意しておいたにもかかわらず、1名

がスーツケースの中に入れたまま。その場で即、バスを下り、積み込んだスーツケースを引き出させ、パスポートを手元に持たせた。

このまま航空会社に預け放しにすると、スーツケースはフランクフルト行の航空機の貨物室に収まって、最終目的地の大阪伊丹空港まで行く。アテネ空港で出国手続きに必要なパスポートがないため、大変なことになってしまふ。そうになると、航空会社から出発時間を遅らせたことで添乗員が責められるのだ。

ギリシャの出国カードの記入方法、途中フランクフルト空港で約5時間の待ち合わせ時間に日本に持ち帰る酒、たばこ、香水の免税品と数量について、日本到着時の入国管理手続きについて、丁寧の説明した。すでに帰国後の学校での講義モードになっているなど実感。

マイクでしゃべれる最後のチャンスなので、協力してもらったことへのお礼の挨拶の後、我々が訪問した国の人たちから、いかに日本が尊敬されているかを実感したのである。と、その実感を継続するために私たちがしなければならぬことは、相手国を尊敬し、ある時は援助し、またあるときは援助してもらう。今回

の「卒業旅行」が、重箱の隅から見る世界でなく、高所から鳥観図的な見方ができる人になっていただきたきっかけになればと思います、と締めくくった。

20時30分、JAL408便のゲート前に集合、学生たちの手には免税品のお土産が一杯。日本航空から預かっている全員分の座席番号が60番台以上のものがあるので、ジャンボの2階席ではないかと係員に尋ねると「その通りです」。私は新しい体験が出来る、(いい年して)心の中でガッツポーズ。そして、2階への螺旋階段を上って指定席に。他のお客様たちに対して“優越感”を覚えてしまった。米国のボーイング社製のジャンボ機で、型式747SUD-300は747の「上部デッキを延長した改造型」4発ジェット機。全座席数360席、全長約70m、全幅約60m、全高約19m、乗務員は機長2名、副操縦士2名、航空機関士2名、CA(キャビン・アテンダント)約25名。日本への飛行ルートはフランクフルトを出発後ウラル山脈、ハバロフスク上空を経由して成田まで約12時間を予定。余談だが、出雲市から東京までの寝台特急「サンライズ出雲号」も約12時間です。

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

終戦日母校に奉安殿の趾

近藤 昌平

補聴器に夏夕闇の風の音

原 博己

小さき蜘蛛糸張り緻密に巣をかける

片岡 正人

親蔓と子蔓孫蔓胡瓜かな

隆愚

紫陽花や検査待つ間のブラジル戦

大槇 三代子

駅までは日傘で歩く今日の朝

寺内 龍二

「お母さん…」夜の病棟外は雨

赤川 冬人

西空に黒雲重く走り出す

松岡 初枝

下校の子らに雷鳴追る

投稿&寄稿

候のことば

「蒙霧升降」

隆愚

八月七日は二十四節気の「立秋」ですが、八月十七日から二十日頃が七十二候の立秋の末候で「蒙霧升降」(のうむしようこうす。又は、ふか

ききりまとう)の候といえます。深い霧がたちこめる頃です。春は霞たち、秋は霧けぶる空模様。「蒙霧」はもうもうとたちこめる霧の事。「升降」は「昇降」と同じです。

霧に立ち込められた状態は「霧の帳(とばり)」「霧の幕」と形容されてきました。また、霧が立ち上がる様子を、お香の煙にたとえた「霧の

香」という表現もあります。

「早星」(ひでりぼし)

八月の夜空には、かつて豊作を占った星があります。赤く輝く早星と呼ばれる星。火星、牛飼座のアルクトウルス、さそり座のアンタレス。そのアンタレスが赤く輝くほど、その年は豊作になるといわれたそうです。あまりに真つ赤なさそり座の星には酒酔い星という別名もあります。

「全身麻酔2」

赤川 仁洋

手術というとドラマのイメージしかない。ストレッチャーに乗せられて手術室まで搬送される……。

「車椅子を使いますか」

担当の看護師さんに訊かれた。

「大丈夫、自分で歩けます」

一階下の手術室の前で、手術担当の看護師さんに訊かれた。

「手術台までどうしますか?」

「自分で歩きます」

手術室は広くて、かなり歩いた。手術台にも自分でよじ登って体を横たえた。通常の手術はこんな感じなのだろう。

手術後が大変だった。導尿管はもちろん、酸素マスク、点滴、手術部

位から血液を輩出するドレーン、足首には血栓を予防するために弾性ストッキングを履かされて、電動器具まで装着されている。

導尿管を外してもらってからは、自分でトイレに行けるようになったのだが、ドレーンの排血パックを首に下げて、点滴スタンドをゴロゴロ転がして進む。扉を開けたままで、看護師さんに見守っていただく。両親を自宅で介護したが、介護される側の労苦を身に染みて味わった。

「変な音がしますね……」

隣の患者さんに訊かれた。85歳の方で、両膝の人工関節から両目の手術、今回は脊椎の内視鏡手術と歴戦の勇者。子供の頃の悪癖の歯ぎしりが復活していたようだ。理由を言って謝ると、それで気心が知れたのか、談笑することができた。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

ー 硬式テニス参加者募集 ー

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)
場所：三次運動公園の屋内&屋外コート

- ・ 火曜日 (9:30 ~ 12:00)
- ・ 水曜日 (9:30 ~ 12:00)



《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
- 教室&講座案内
- イベント情報
- あなたの大切な本の紹介
- ボランティア・ライター(現地記者)募集!

※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



宮角孝雄写真展

場所：三良坂平和美術館 (Tel0824-44-3214)

日時：7月31日～8月30日 9時～17時
(入館は 16:30 まで)

入館料：一般 400 円 (65 歳以上 300 円)

※8月4日(火)は「平和のつどい MIYOSHI2026」に
協賛して午後 8 時まで開館、入館料無料



「ぐんぐん伸びよう会」(教室：川西町 241 連絡先：080-3631-9125 やない)

当教室では、一人ひとりに合った学習(ちょうどの学習)をし、**年齢・学年に関係なく、
生徒ができるところから始める学習法**です。**対象は、乳幼児～小学生。**

教室とご家庭との二人三脚で**子どものもっている可能性を伸ばしていきましょう。**無料体験受付中!!

0~3 歳：4,000 円(週 1 回)。4 歳～小 6 生：算数+国語(4,500 円、週 1 回)。お気軽にご連絡くださいね。



編集後記

◇ 8 月号をお届けします。いきなりの猛暑です。予想や覚悟はしていても、身体が対応してくれません。どら書房は天井の扇風機しかないのです、ひたすら耐えるしかありません。我慢できない時は、唯一のエアコンがある漫画ルームに避難。

◇ 心強い味方は、店頭の野菜販売で売れ残ったキュウリとミニトマト。捨てるのがもったいないので、大量に食べているのですが、それでビタミンと水分を補給しています。◇ 心配していただいた腰の内視鏡手術の経過ですが、コルセットをしないうになったからまた痛みが出て不安定に。老化もあるので、今後も付き合いは長そうです。

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183

協賛：九日市愛好会

第298回

くunchichi しよつばら九日市

毎月九日に開催されている街角市場です。発祥は天正年間（1573～1591）、織田信長が安土城を築いたり、豊臣秀吉が大阪城を築いたころ、物々交換の市（いち）として始まりました。その歴史ある市が2001年に復活、地元の出店はもちろん、近隣他県からの出店＆名産品で賑わっています。



8月9日(日)
9:00～12:00

TOPICS

- ★猛暑対策で閉店は12時です。
- ★市民ギャラリー「アート多愛夢」
8月8日（土）～10日（月）10時～15時
「五嶋千絵・絵画展」
- ★キッチン北川・店頭販売（9:30開始）
※大好評の美味しいお惣菜がたくさん！
かき氷あります!!
- ★HONMACHI STAND→コーヒー 100円引き
- ★どら書房、無料休憩室（漫画読み放題）
※本格コーヒー 100円
- ★あなたも自分のお店を出してみませんか？（出店者募集中！）

* 出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円～
九日市愛好会事務局 FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10（楽笑座内）

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

